

Haematology and Blood Transfusion Vol 26
Modern Trends in Human Leukemia IV
Latest Results in Clinical and Biological
Research Including Pediatric Oncology
Edited by R. Neth, R. C. Gallo, T. Graf,
K. Mannweiler and K. Winkler
Springer-Verlag, 1981

白血病の研究は多岐にわたり、かつその進歩は速い。1973年ドイツの Wilsede で開かれた血液学に関するいわゆる Wilsede meeting が、回を重ね1980年には第4回を数えるに至った。本書はこの meeting の全報告を Neth 博士らによりまとめたもので、「Haematology and Blood Transfusion」第26巻の特集となっている。内容は白血病、悪性リンパ腫の臨床、染色体、細胞生物学、免疫学、ウイルス学、分子生物学の各分野にわたっている。

第1章は「Blood」の編集長も勤め、飛行機事故で亡くなった故 Frederick Stohlman Jr. に対する追悼講演で、最初に Klein によりネズミおよびヒトリンパ腫の発生におけるウイルス転換と特殊な細胞遺伝学的変化の相関的役割がのべられ、バーキット腫瘍をはじめとする豊富な過去の成績をもとにした綜説がなされた上で、結局ウイルスは化学的、物理的腫瘍惹起因子と同様に腫瘍発生の口火となり得、その主な役割は長期間生存する前腫瘍細胞の確立にあること、特殊な遺伝学的変化が前腫瘍細胞から顕性腫瘍細胞への移行に関連があること、細胞遺伝学的変化が腫瘍増殖を促がす遺伝子とそれを阻止する遺伝子の間の均衡を変えることにより作用すること等が腫瘍発生の基本となるとしてしている。次に Kaplan はホジキン氏病を生物学的、免疫学的面から論じ、ホジキン細胞、リード・ステルンベルグ巨細胞の本質、ならびに本疾患の拡がりや単源性に発生し、リンパ行性に進展して行くことを本疾患が腫瘍であるという立場から論じている。

第2章は臨床に関する論文が21篇納められており、白血病の染色体、前白血病状態、Terminal deoxynucleotidyl transferase、化学療法、骨髄移植、T細胞白血病などの現在臨床面で最も話題に富む問題が簡潔に記述されている。

第3章はリンパ腫の細胞遺伝学に関するものが15篇ある。ことに Purtilo は免疫不全と多クローン性リンパ増殖を特徴とし、遂にはリンパ腫あるいはリンパ肉腫へ移行する Epstein Barr ウイルスが関係する X-linked lymphoproliferative syndrome (Duncan's disease) について興味ある報告をしている。

第4章は細胞生物学、免疫学的方面についての論文が31篇のせられている。細胞培養を使った血液幹細胞や白血病細胞の分化、成熟に関する研究が多い。「顕微鏡を使わない血液学」として、旧来の形態学を基盤として考えられていた血液細胞の発生、分化、成熟の考え方を書き改めて来たこの分野も、まだ未知の問題を残している。

第5章は血液学の大きな命題となっている白血病、悪性リンパ腫の病因を考える上に重要なウイルスに関するもの、分子生物学に関するものが32篇納められている。動物白血病とウイルスに関する論文が多く、ヒト白血病については少ないのがさびしい。ただ Gallo らによる新しい retrovirus であるヒトT細胞リンパ腫-白血病ウイルス (HTLV) がヒトの T-細胞リンパ腫-白血病で発見されたという報告が目される。

以上、本書は学会の記録であるので、内容は非常に広い分野にわたっているが、論文はいずれも簡潔で要領よくまとめられており、今日の白血病および悪性リンパ腫に関する臨床、基礎研究の最先端の事項を窺い知るのに絶好の著書と云える。

(米満 博)

[千葉医学, 59, 104, 1983]